篠崎図書館報　2010年1月1日発行（隔月発行）010号

P2　**特集　雪が舞う小説たち**
P3　スタッフのセレクション！　「小説　立花宗茂」
P4　人物ブックマーク　「久坂玄瑞」
P4　視聴覚資料の森　CD「ベートーベン　弦楽四重奏曲第14番　嬰ハ短調　作品131」
P4　江戸川まいにんぐ　「塩の道＝篠崎街道」

編集・発行：江戸川区立篠崎図書館
住所：〒133-0061
江戸川区篠崎町7-20-19
篠崎文化プラザ内
TEL：03-3670-9102
http://www.shinozaki-bunkaplaza.com/library

館長の紙BLOG　2010年1月吉日

古くあれ新しくあれ我が文学

毎年、初詣は最寄りの神社に出かけています。最寄りも何も、自宅から徒歩2分のところに「神の憑り代（よりしろ）」があるのはなかなかのアドバンテージです。小さな神社なのに今年の元旦は初詣に行列ができていて、何にでもすがりたい厳しい世相を反映しているようでした。

まだ寒村だった篠崎村の名主衆によってこの神社が建立された江戸時代後期は、今と似て諸藩の経済がどんどん窮屈になっていました。

その時代の空気は、たとえば時代小説の名手、藤沢周平氏の作品にうかがえます。それらの主人公たちはそれぞれの立場、階層につきものの難題として受け止め、藩の枢要にある者は、無理な開墾事業をやめさせる今でいう「事業仕分け」を断行し、貧乏侍ならば当時の派遣村「口入れ屋」に通いつめ、長屋の住人は米の節約に余念がありません。

昨年は図書館の自主事業で、友好都市である鶴岡市にお世話になり、藤沢氏の作品に目を通す機会が多々ありました。おもに文庫本で読んだのですが、少なからず驚いたのは、時代小説にもかかわらず秋山駿氏や桶谷秀昭氏が解説を引き受けていることです。秋山氏は「蝉しぐれ」に流れる「詩魂」を心気晴朗な筆致で解き、桶谷氏は「花のあと」に「藩の時代に規定された世界」を探っています。

個人的な意見として、わたしの小説多読時代、（軟骨ながら）「文学的骨格」をつくってくれたのが「近代文学」派の系譜の作家の作品群であるとすれば、それに即した論説は骨格を整然と支えてくれる「文学的コラーゲン」でした。

そのほかにも、磯田光一、本多秋五、荒正人氏ら時代と社会への立脚点がはっきりした論客が、もし藤沢作品に踏み込んでいたらどうなっていただろうか、と考えることがあります。

「『都会の石壁ばかりを描いて、うるおいがない』小説ばかりの今日」（秋山氏の言）から抜け出る、時代をきちんと表現できる文芸はこの世相だからこそ必要なのではないでしょうか。

お知らせ＆イベント情報

ウクレレと歌の時間旅行

1月24日（日）
14:00～16:00（開場：13:30）
旅先案内人：BUsas4（ブーサスフォー）

曲目：ブルーハワイ、亜麻色の髪の乙女、涙そうそう他
場所：篠崎文化プラザ講義室
定員：50名（当日受付、先着順）どなたでも参加できます。
入場料：無料
お問合せ：篠崎図書館（03-3670-9102）まで

第9回 大人のための映画会／*ライブラシネマ篠崎*
「市民ケーン」

〈Citizen Kane〉（1941年　米作品）
監督：オーソン・ウェルズ
出演：オーソン・ウェルズ　ジョセフ・コットンほか

2月20日（土）　14:00～16:00（開場：13:30）
場所：篠崎文化プラザ講義室
定員：70名（当日受付、先着順）
どなたでも参加できます
入場料：無料
お問合せ：篠崎図書館（03-3670-9102）まで

雪が舞う小説たち

雪には様々な表情があります。淡雪、粉雪、細雪、ぼたん雪、綿雪…といった優しい表情もあれば、大雪、吹雪、雪崩といった厳しい表情もあります。その表情によって、物語に対する印象も、大きく影響を受けます。今回は、そんな印象的な雪の場面のある小説をご紹介いたします。

桜田門外ノ変

吉村　昭　新潮社

請求記号Fヨ　葛西ほか所蔵

井伊直弼は安政の大獄で尊皇攘夷を唱える反対派を弾圧し、水戸に下された勅命書の返納を迫るなど、水戸藩に対する弾圧を強化しました。これに対して水戸藩の急進派は激怒し、井伊直弼暗殺を計画。運命の決行日、季節外れの大雪に…。幕末史上最大のテロ事件、桜田門外ノ変を扱った歴史小説。今秋、大沢たかお主演で映画上映予定。

雪シチュエーション

雪の中を粛然と行列が進んでくる。（中略）深い静寂の中で供備えの雪をふむ足音がきこえてきた。体のふるえがさらに増し、右手にした傘が音を立ててゆれはじめた。緊張にたえかねて前夜のとり決めも忘れた同志が、早くも抜刀して斬り込むような恐れにとらわれた。

雪国

川端康成　新潮社

請求記号BFカ　篠崎ほか所蔵

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」

この有名な冒頭文から始まる、不朽の名作。無為徒食の生活をしている島村は、雪深い温泉町で芸者をしている駒子と情交を持ちますが、それ以上の真剣な気持ちにはなれない…。そんな島村との交際の中で、「精いっぱい生きている」駒子の一途な気持ちを、哀感を漂わせながら美しく描いています。

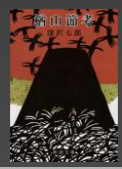
雪シチュエーション

窓で区切られた灰色の空から大きい牡丹雪がほうっとこちらへ浮かび流れて来る。なんだか静かなうそのようだった。島村は寝足りぬ虚しさでながめていた。（中略）薄く雪をつけた杉林は、その杉の一つ一つがくっきりと目立って、鋭く天を指しながら地の雪に立った。

楢山節考

深沢七郎　新潮社

請求記号BFフ　篠崎ほか所蔵



民間伝承の棄老伝説をテーマとした小説。正宗白鳥に「人生永遠の書の一つとして心読した」と言わしめ、三島由紀夫ら当時の有力作家たちにも衝撃を与えました。主人公の老婆、おりんは家の事情から、自ら山〈行くことを決意します。当日、息子に背負われて楢山〈向かうおりん。楢山に行く日に雪が降ればその人は運がよいと云い伝えられているのですが……。

雪シチュエーション

楢山の中程まで降りて来た時だった。辰平の目の前に白いものが映ったのである。立止まって目の前を見つめた。楢の木の間に白い粉が舞っているのだ。

雪だった。辰平は、

「あっ！」

と声を上げた。そして雪を見つめた。雪は乱れて濃くなって降ってきた。

ホワイトアウト

真保裕一　新潮社

請求記号BFシ　篠崎ほか所蔵

この物語が心に響くのは、テロリストとの闘いもさるものながら、かつて自分のミスで同僚を死なせてしまった男が、再び起きた困難に際し、自分自身の弱さに挫けず立ち向かっていき、己の矜持を取り戻すというストーリーだからでしょう。襲い来る雪と風の恐怖に耐え、再び救助に向かう主人公の姿は、きっと熱い何かを残してくれるはずです。

雪シチュエーション

今も吉岡は、自分が戻ることを堅く信じて、吹雪に耐えている。せっかく婚約したばかりだというのに、あいつの彼女を悲しませるわけにはいかなかった。待っていろよ、吉岡。今、俺が行く――。

富樫は雪と風に立ち向かい、一歩一歩、ガスの中を進んでいった。

蒲生邸事件

宮部みゆき　光文社

請求記号Fミ　篠崎ほか所蔵

宮部みゆき作品にファンが多い理由のひとつに、ラストの終わり方のうまさが挙げられるのではないでしょうか。この物語の〈タイムスリップものだからこそ味わうことのできる、やさしくせつないラスト〉は、数ある宮部作品のなかでも最高級のラストシーンの余韻を残してくれるのでは、と思います！

雪シチュエーション

だが孝史の頭のなかには、永遠に変わらぬふきがいる。二十歳のふき。白い割烹着のふき。心配するふき。怒るふき。笑うふき。冷たいあの手の感触。雪に覆われた蒲生邸。生涯消えることのないであろう孝史の記憶の息づく場所。

そこでは今も、佇むふきの髪に肩に、ふたりが初めて出会ったあの日、昭和十一年二月二十六日の雪が降りつもる。

雪

太郎を眠らせ、
太郎の屋根に
雪ふりつむ
次郎を眠らせ、
次郎の屋根に
雪ふりつむ

詩集「測量船」
三好達治
日本図書センター
請求記号911.5ミ
篠崎ほか所蔵

ムーミン谷の冬

トーベ・ヤンソン　講談社
請求記号B949ヤ
篠崎所蔵

冬眠に入ったのに、春がこないうちに、たった一人眠りから覚めてしまったムーミントロール。あたたかい我が家を飛び出し、はじめて見る冬の世界は、驚くことばかり。雪を見るのだってはじめてです。

おなじみのちびのミイをはじめ、おしゃまさんやヘムレンさんなど、へんてこな冬の生きものたちとムーミントロールの楽しい物語です。心が温かくなりますよ。

雪シチュエーション

自分のあたたかい鼻の上に、つぎつぎに雪がのっかっては、とけていきます。彼はそれを手でつかまえて、しばらくのあいだうっとり見とれていました。

雪のひとひら

ポール・ギャリコ　新潮社
請求記号933キ
篠崎ほか所蔵

空から舞い降りた雪の結晶〈雪のひとひら〉の誕生から死まで、その一生が語られます。

おのれの生きた意味を問わずにいられない〈雪のひとひら〉は、最後に「誠実に生きてきた自分の一生は、何ひとつ無意味なものはなかった」と悟ります。

純粋に、平凡だけど生きることの意味をかみ締めることができる素敵な物語です。

雪シチュエーション

まあおちる、おちる、おちる！ゆりかごにでものったように、やさしく風にゆられ、右から左へ、ひらひらと羽のようにふきながされながら、雪のひとひらは、いつのまにか、いままでついぞ見も知らぬ世界にうかびでていました。

落語

夢金「志ん朝復活(ほ)色は匂へと散りぬるを」収録

古今亭志ん朝　新潮社
請求記号K7／コ06802
篠崎所蔵

雪の降る寒い夜、浪人とその妹を渡すことになった欲深い船頭。なんとか酒手(チップ)に与ろうとするが、実はこの浪人、娘とは旅先で会った他人であり、娘の持つ大金目当てに殺しを画策し、その手伝いを船頭にさせようとするのだが…。

雪シチュエーション

「欲深き人の心と降る雪は、積もるにつれて道を忘るる」なんて～ことが言ってありましてひどいのになるって～と寝言にまで金のことを言っておりまして…。「ひゃっくりょおおおお～（百両）、欲しいよおおお～。」

スタッフのセレクション！第10回

篠崎図書館で働くスタッフがほとんど個人的趣味で選んだおすすめ本を紹介します。今号は、Nさんが選んだ歴史小説です。

童門　冬二「小説　立花宗茂」

集英社文庫　請求記号:BFト　所蔵館:篠崎

「その忠義、鎮西一。その武勇、また鎮西一。」

これは、現在私の一押しの戦国武将、立花宗茂を太閤秀吉が評した言葉です。今回ご紹介する本は、そんな宗茂のことがよくわかる、私が一番好きな本です。

本書の主人公、立花宗茂が生まれたのは戦国時代、信長が足利義昭を奉じて京に上洛した頃です。大友宗麟の二人の忠臣を実父、義父として成長しました。幼少時より合戦の心構えを厳しくおしえこまれた宗茂は、関ヶ原の戦いでは豊臣家への恩義を忘れずに石田三成に味方したことで敗北、そのため領地を没収されてしまいます。しかしその後、浪人するなど苦労の末、徳川秀忠に見出され、大名として旧領柳川に返り咲いたのです。この作品は人間として筋を通した宗茂の伝記的歴史小説といえます。

宗茂は裏表のない、人に愛される性格の持ち主で、家臣や領民はもちろん、敵対していたものまでも魅了しました。それがよくわかる宗茂と家臣の関係を表す有名なエピソードがあります。宗茂が浪人中、家臣たちは宗茂のために虚無僧や力仕事の人夫をして生活をつないでいました。しかし生活は苦しくなり、米が不足したため、ご飯をおカユにせざるを得なくなりました。その出されたおカユを見て宗茂は「おれは腹など壊していないからカユにする必要はない。堅い飯を食わせろ。」と言います。普通だったら、ムッとするところですが立花家臣団は違いました。彼らは「さすが殿だ。あっぱれだ。仕え甲斐がある」と思うのです。現在では理解できないかもしれませんが、彼らは宗茂の「殿さま気質」を、いや宗茂のすべてを愛していたのです。

作中の宗茂に関わる人々の宗茂への想いと、宗茂の彼らに対する想いの強さに、私はたびたび胸が熱くなりました。童門氏の小説は噛み砕いた文章で分かりやすいので、歴史ものはちょっと…という方にもオススメです。私の稚拙な文章では、立花宗茂の魅力は伝えきれないので、是非とも本書を読んで宗茂の魅力に触れてみて下さい 。

人物ブックマーク

人物ブックマークとは歴史上の人物を紹介し、一緒に関連本を紹介するコーナーです。

第七葉　久坂（くさか）　玄瑞（げんずい）

「諸侯侍（たの）むに足らず、公卿侍むに足らず、草莽（そうもう）志士糾合義挙の外には迚（とて）も策これ無き事と私共同志中申合せおり候事に御座候、失敬ながら尊藩も弊藩も滅亡しても大義なれば苦しからず」と、藩を超えた志士たちの連合を訴えた武市瑞山宛ての書簡を預かった坂本龍馬は、土佐藩帰還後すぐに脱藩を決行する。この書簡を書いた久坂玄瑞と面会後の脱藩であった。様々な要因はあったのだろうが、玄瑞の言に触発されるものがあったのかもしれない。

その玄瑞とは、長州萩の人である。松下村塾に学び、高杉晋作と共に「村塾の双璧」と言われた。吉田松陰が自分の妹を嫁がせるほど才を認めた人物であった。松陰亡き後は松下村塾を支える存在となるとともに、尊攘の志士として長州藩の中心を担うようになる。京都で八・一八の政変※が勃発すると、自ら入京し長州藩の失地回復に奔走。しかし長州藩本国では、実力をもって京都に乗り込もうとする進発論が活性化していた。玄瑞はこれを自重するよう説得するも成らず、最終的には禁門の変に参戦し死亡する。享年25歳であった。

志半ばで倒れた玄瑞だが、その遺志は様々な形で同志たちに受け継がれる。明治まで生き残った者のみが、維新を成したわけではないのだ。

※八・一八の政変……会津・薩摩藩によるクーデター。朝廷内に強い影響力を持っていた長州藩を中心とする尊攘派を一夜にして京都から追放した。

久坂元瑞関連本

「高杉晋作と久坂玄瑞」 池田諭　大和書房　請求記号:289タ　所蔵館:中央ほか

「松下村塾の双璧」と言われた高杉晋作と久坂玄瑞。同じ師に学び、同じ志を持ちながら異なる思想を持って行動を起こした二人の成長を追った一冊。

視聴覚資料の森

ベートーベンの極北

ベートーベンはその最晩年に、数曲の弦楽四重奏曲を残しています。この曲もその中の1つで、まとまった曲としては最後から2番目に作られたものです。全体の構成は通常の弦楽四重奏曲が4楽章形式であるのに対し7楽章からなり、作曲家が自由な発想のもとに作ったことがうかがえます。曲の内容は、ベートーベンらしい雄渾な曲想もみられるものの、甘いところは微塵もなく、正に極北と呼ぶにふさわしい一種の厳しさと純粋性に貫かれています。このため、当初は聞きにくいという印象を持たれるかもしれませんが、聴き込んでゆくうちに、ベートーベンが最晩年に到達した世界が実感できるのではないでしょうか。

この前後のベートーベンは、溺愛する甥の自殺未遂と入営、自身の耳や内臓疾患の悪化と、人生でも最悪の時期にあったといえます。その中からこのような純粋で長大な曲が生まれたことには驚かされます。それにしても、ベートーベンはその作品と人生を対比してしまいがちな作曲家です。ロマン・ロランやアンドレ・ジイドの影響もあるのでしょうか。純粋に曲を曲として聴けない面を持っているようです。しかし、それはある種の邪道と知りつつ人生を詮索してしまうのも、この作曲家の魅力の一つかも知れません。

CD「弦楽四重奏曲第14番　嬰ハ短調　作品131」

ベートーベン　請求記号:K7/3931　所蔵館:小岩

江戸川まいにんぐ　発掘　第10回

塩の道＝篠崎街道

「区内路上観察」で遭遇した、けっこうレアで、それでいてけっこう役立ちそう、な情報を毎回お届けしています。

篠崎街道は江戸川に沿って続き、小岩の一里塚が北の終点になっています。しかし、道そのものはずっと北に延びています。

篠崎街道の入り口になる市川市行徳の海岸は戦国時代以来東日本でも指折りの塩の産地でした。塩の俵は渡し船で篠崎側に持ち込まれ、牛馬で北へ北へと向かい、鳩ケ谷を越えて岩槻まで届けられました。篠崎街道は「塩の道」でした。塩の道といえば信州の千国街道が筆頭ですが、わたしたちの足元にもあったのです。

江戸時代になると安価な瀬戸内海産の塩が江戸にも幅をきかすようになりますが、行徳の塩田は幕府によって手厚く保護されました。それは、西側の動き如何によって幕府が「塩絶ち」にされるのを防ぐための戦略的政策だったのです。行徳の製塩業が終焉したのは昭和に入ってからでした。

渡しは河原村（現・市川市河原付近）と伊勢村（現・江戸川区東篠崎町）を結んでいました。画像は渡し場の跡で、奥に見える水門で旧江戸川につながっています。